

「キー」かな？ ちがう。ヘキユー」かな？ 「イー」かもしれぬ。

日常で自分がいかに、決まりきった感覚に頼って、音を表現しているか、わかってきました。

そこにアンディさんの声。

「誰も、動くな、なんて言っていますよ。なぜ、みんな止まっているんですか？」

どうやら頭のなかには、「自ら勝手につくりあげた、きまり」もあつたようです。

「ひとを殴ったり、蹴ったり、抑圧」してみる

輪になって座る参加者に向かって、「5、6人の方、手伝いをお願いします」と呼びかけるアンディさん。

歩み出た参加者のなかから、さらにひとりが選ばれました。そして、

「それでは、出てきてくれた方々は、このひとに思いきり、暴力をふるってください。もちろんフリですが、本気でやってください。やられるひとは、本当に痛がってください」

暴力をふるう役になったひとは、躊躇し、はじめはこわごわ、一発ずつ、



ひとりのひとを「抑圧」のポーズで取り囲む

殴るふりをしています。しかしそのうち「暴力をふるわなくてはいけない状況」に慣れてくるのか、スピードも強さも上がってきます。暴力を加えられる側は、倒れて、頭を抱え、必死で身を守ろうとします。

周りで見ているほかの参加者も、つらく、イヤな雰囲気になります。ほんの数分間ですが、ここでは、演じるひとにも見るひとにも、笑顔はありませんでした。

次は参加者全員で「抑圧」のイメージをつくりまします。

抑圧を受ける役には選ばれたひとりが床に寝そべります。ほかの参加者はそれぞれ、その周りを取り囲むようにしながら、抑圧をイメージするポーズとります。全員が参加すると、抑圧を受けているひとの姿はすっかり隠れてしまいました。

暴力と抑圧のワークを終えたとき、次のワークのために、いまの気持ちを覚えておいてほしい、とアンディさんは言いました。

「たのしい気持ちから暴力は生まれぬ」 アンディ・ヒクソンさん



Andy Hickson ● イギリスを拠点に活動する劇団「タイ・ツアーズ」の主宰者のひとりであり、脚本家。いじめや暴力の本質を訴える演劇や、「非暴力アクションワークショップ」を世界各地で行う。

子どものころの2年間、マレーシアのテナという先住民の地に住んでいたことがあります。その間、一度も暴力を目にしませんでした。テナのひと全員が暴力をふるわないわけではないでしょう。記録によれば、復讐することもあると言います。けれどもテナはマレーシア国内でも非暴力民族と呼ばれています。

民族文化的に東南アジアのひとびとは、自分と他人との境界線が薄く、他人のことを自分のことのように思う文化があると言われます。だから他人への危害を、自分への危害と感ずることができると言います。テナのひとびとは、いまなおそうした感覚を幼いうちから身につけるのです。

「非暴力アクションワークショップ」は、テナでの経験だけをもとにつくったものではありません。ほかにもほくは、世界のいろいろな地域でいろいろな生活習慣や職業を経験しました。漁師もナイトクラブのマネージャーもボクサーも、ぶどう農園の農夫もしました。いまは劇もつくりまします。けれど、それがどういふことだったとか、分析したり型にはめることは、好きではありません。

ません。世の中では型にはめることがたくさんありますが、それ自体が暴力的なことです。

たとえば、暴力と非暴力の間には非常に薄い壁しかありません。

ワークショップのなかで、暴力をポーズで表現するワークをしました。そのあとで、2カ所だけポーズを変えるわけですが、参加者はみんな、ポーズから暴力を取り除くことができたと思います。これは日常生活でも同じことです。暴力は怒りから起るのですが、怒りは暴力ではない形にも変えられるのです。そのことを、体験として知ってほしいんです。

わたしたちは日常生活のなかで多様な暴力を体験しています。「いじめ」にしても、ほかのひとにとってはただのあそびかもしれません。けれども、誰かが暴力だと感じることが真剣に受けとめなければいけないのです。そして誰もが被害者にも加害者にもなることを覚えてほしい。暴力が良い・悪いと定義するだけでは、何も変えられないのです。

確かなことは、「たのしいと感じているときに、暴力は生まれぬ」ということ。ほかのワークショップでは講義はしたくない。たのしくやりたいと思っています。そのひとたちが自分のなかにある力を、自分の感覚で感じてほしい。とくに年齢が低いひとほど、ことばで言うよりも、同じ年齢のひとから聞く情報のほうがよっぽど受け止めやすく、意味があるんです。